

社会人及び大学野球における試合のスピードアップに関する特別規則

公益財団法人日本野球連盟
公益財団法人全日本大学野球連盟

公益財団法人日本野球連盟並びに公益財団法人全日本大学野球連盟は、試合のスピードアップを図るため、以下のとおり共通の特別規則を制定することに合意する。

1. 投手の「準備投球」は公認野球規則 5.07 (b) に準ずる。(時間、球数の制限はない。) また、試合に出場している投手のベンチ横及びブルペン (室内を含む) でのキャッチボールを禁止する。
2. 投手は、捕手、その他の内野手または審判員からボールを受けた後、走者がいない場合には12秒以内に、走者がいる場合は20秒以内に投球しなければならない。
違反した場合、球審は走者が塁にいない場合はただちにボールを宣告し、走者がいる場合は警告を発することとし、同一の投手が2度繰り返したら、3度目からはその都度ボールを宣告する。
なお、塁に牽制球を送球したときは、20秒の計時をリセットする。
3. 監督またはコーチが投手のもとへ行くことに関して、規則 5.10 (1) を適用する。
4. 監督またはコーチが1試合(9イニングス)に投手のもとへ行ける回数を3回までとする。この場合、投手を交代させた場合は回数には数えない。
3回投手のもとへ行った後、4回目以降に行けば、そのときの投手は自動的に試合から退かなければならない。
スピードアップの観点から、監督またはコーチが捕手を呼びよせる行為も同様とする。
なお、延長回に入った場合には、規則 5.10 (1) の規定を適用する。
5. イニングの途中で投手を交代させる際に監督またはコーチが投手のもとへ行き、新しい投手が準備投球を始めた後もそのまま留まっていた場合には1回に数える。
また、イニングの初めから投手を交代させる場合においても、監督またはコーチがマウンドに行った場合1回に数える。

6. 監督またはコーチが4回目に投手のもとへ行くとき、または1イニングに2回目に投手のもとへ行くときは、監督は投手のもとへ行く前に球審に投手の交代を告げなければならない。

7. ダブルスイッチ（投手交代と同時に野手も交代させて、打撃順を入れ替える）の場合、監督はファウルラインを超える前に、複数の交代と入れ替える打撃順を球審に通告しなければならない。監督またはコーチがファウルラインを超えてしまえば、その後にダブルスイッチすることはできない。

(5.10 (b) 【原注】)

8. 監督またはコーチが投手のもとに行った場合、審判員がタイムをかけてから45秒以内に打ち合わせを終了する。

9. 内野手（捕手を含む）が投手のもとへ行ける回数を、1イニングにつき1回1人だけとする。

監督またはコーチが投手のもとに行ったときも1人の内野手だけ（この場合は捕手を含まない）が投手のもとへ行くことが許され、そしてそれは内野手が投手のもとへ行った回数に数えられる。

なお、投手交代により新しく出てきた投手が準備投球を終えた後、捕手が投手のもとへ行っても、捕手が投手のもとへ行った回数には数えない。

10. 1試合につき攻撃側の話し合いを3回まで認める。攻撃側の話し合いは、監督が打者、走者、打者席に向かう次打者またはコーチと話し合うためにタイムをとって試合が遅れる場合にカウントされる。

なお、延長回に入った場合は、それ以前の回数に関係なく、3イニングスにつき1回の話し合いが認められる。

ただし、攻撃側の責めに帰せないタイム中（例えば、守備側が投手のもとに集まっているとき、選手が負傷したとき、選手の交代のときなど）に話し合いを持っても、さらに試合を遅延させない限り、回数には数えない。

附 則

この規則は、平成27年2月3日より施行する。

附 則

この規則は、平成31年2月15日より一部を改正する。